

レッジョ・エミリア幼児教育の紹介

--- Reggio nell'Emilia ---

2011/1/8(土)

担当：佐藤 朝美

東京大学情報学環 助教

◆本日の内容◆

- 1) レッジョ・エミリアとは
- 2) 子どもたちの作品
- 3) レッジョ・エミリア・アプローチとは
- 4) レッジョ・エミリア・アプローチの特徴
- 5) 空間の特徴
- 6) レッジョ・エミリアとアメリカ（と日本？）
(参考文献)



1) レッジョ・エミリアとは [3.4.29(終).30.31.32.33]

場所

イタリア共和国エミリア＝ロマーニャ州

概要

エミリア、ロマーニャ地方は、「宝の島」とも呼ばれるくらい農産、畜産品の豊かな地方で、特にレッジョはパルミジャーノ・レッジャーノ・チーズの産地として有名で、レッジャーノとはこの「レッジョの」という意味である。

モデナ・レッジョ・エミリア大学、ボローニャ大学の校舎がある。

歴史

レッジョは 1873 年から経済成長と人口増加が進み、古い城壁を壊した。1911 年には人口が約 7 万人いた。強力な社会主義の伝統が育った。後のファシスト政権下では、これらの伝統と傾向からレッジョ市民は抑圧の対照となった。1943 年 7 月 26 日、ファシスト政権の崩壊はレッジョ市民の熱狂を鼓舞した。数多くのイタリア・レジスタンス集団（パルチザン）が、市の田園地帯で結成されていた。

ローリス・マラグッツィ

レッジョ・エミリア保育実践創始者の一人

デュエイ、ヴィゴツキー、ピアジェなどの理論を発展させ、保育の基礎を作った

2) 子どもたちの作品 [書籍参照] [51.52]



レジヨの教育理念

子どもには 百とおりある。

子どもには 百のことは 百の手 百の考え 百の考え方 遊び方や話し方
百いつでも百の 聞き方 驚き方、愛し方 歌ったり、理解するのに 百の喜び
発見するのに 百の世界 発明するのに 百の世界 夢見るのに 百の世界がある。
子どもには 百のことはがある (それからもっともっともっと)

けれど九十九は奪われる。

学校や文化が 頭とからだをバラバラにする。

そして子どもにいう 手を使わずに考えなさい 頭を使わずにやりなさい

話さずに聞きなさい ふざけずに理解しなさい

愛したり驚いたり 復活祭とクリスマスだけ。

そして子どもにいう 目の前にある世界を発見しなさい

そして百のうち 九十九を奪ってしまう。

そして子どもにいう 遊びと仕事 現実と空想 科学と想像 空と大地 道理と夢は
一緒にはならない ものだと。

つまり 百なんか無いという。子どもはいう でも、百はある。

ローリス・マラグツツイ 田辺敬子訳

3) レッジョ・エミリア・アプローチとは

「レッジョ・エミリア・アプローチ」と呼ばれる保育が、世界的に注目をあびています。戦後間もない時期に北イタリアのレッジョ・エミリア市で、地域の共同保育運動として始まったこのアプローチは、理論と実践の両面に優れた教育家ローリス・マラグツィの指導と、市当局のバックアップによりその基礎が築かれました。現在市内には21の「幼児学校」（3-5歳児）と13の「乳児保育所」（0-2歳児）が開かれています。

人口わずか14万人の地方都市に起こったレッジョ・アプローチが、世界的な評価を受けるようになったのは、1991年ニューズウィーク誌に「最も革新的な幼児教育」として紹介され、また『子どもたちの100の言葉』と題した作品展が、東京をはじめ世界各地で催されるようになってからです。来場した世界の教育家やアーティストは、レッジョの子どもたちの高度な表現力と独創的な思考力に目を見張りました。子どもの思考・表現が、一つの世界観にまで高められたメッセージとして見学者に伝わったからです。

レッジョ・エミリアの教育は、子どもと大人の双方が創造性を発揮し、美的で探求的な活動をとおして共に学び、育ちあう関わりを形成することにあります。しかしそれは狭義の芸術教育ではありません。ましてや大人の知識・技能を子どもに教え込むことでもありません。子どもたちは身振り手ぶり、言葉、そしてアートを使って自らの思考や感情を表現し伝達する独立した個人として育ちます。

しかし、その能力が表面化し開花するには、自発的なコミュニケーションのチャンスが与えられる必要があります。そしてコミュニケーションには相手が必要です。親や保育者が、子どものさまざまな表現に対して「見る目・聞く耳」を持ち、同じレベルのコミュニケーションで応答する「術」を体得して初めて、子どもたちは創造性の全エネルギーを開花させることができます。

レッジョ・エミリアの教育は、このような「子どもに波長を合わせたコミュニケーション」が成り立つために必要な保育環境・スタッフ養成・育児支援が実現可能であること、そして実践を積み上げることによって誰の目にも明らかな能力の違いが作り出されることを証明しています。一定の教具やカリキュラムにそって決まったとおりのことを教えるのではなく、子どもと保育者がじっくりとコミュニケーションを取り合いながら、ユニークなカリキュラムを協同で創り出して行くのがこのアプローチの特色です。

4) レッジョ・エミリア・アプローチの特徴

保育実践の特徴：アトリエリスタとペダゴジスタの存在

- ・ 保育者たちは各教室（1クラス20人位）で、2人1組（主任と補助者というのではなく対等の立場で）で活動。彼らは自分たちを絶え間ない記録文書によって子どもたちとの活動に関して情報を集める研究者と捉えている。
- ・ さらに、**ペダゴジスタとよばれる教育専門家**の調整官によって支援される。
ペダゴジスタたちは、保育者たちが組織の方針を支え、実行するのを援助する。
- ・ また、**アトリエリスタと呼ばれる芸術専門家**が、各幼児校に1名配属されている。
各教室にはミニアトリエと呼ばれる小さな空間が設けられ、たくさんの種類の道具や材料が、過去の活動計画や経験の記録とともに置いてある。

<保育概要>

年間予定は、9月1日～6月30日。開校時間は、月曜から金曜日の8:00～16:00。延長サービスは、始まる前が7:30～8:00の30分と、幼児学校終了後の16:00～18:20。

創造性の教育

- ・ 例えば絵を描く際、「見えないものを描く」よう励ましたり、「アイデアがあるなら、それを描いて見なさい」という「アイデアの表出としての描画」の指導を行っている。
- ・ 「美的感受性の発達には、具体性、知覚の鋭敏さ、感情の自発性、注意力、観想力、相対的洞察力、理解力が必要である」とイギリスの研究者が言っている通りの内容、美育、美的感受性を大事にする保育といえる。
- ・ 光と影という強烈な対比（contrast）を好み、影遊びを常に保育の中に出来るようにしてある。OHPが置いてあり、スイッチさえ入れれば影遊びが出来るようになっていたりする。
- ・ どの幼稚園にも三角形に3枚合わせにした鏡が置いてあり、中で子どもが遊べるようにしている。万華鏡の中にいる感じが味わえるようになっている。
- ・ コンピュータなども潤沢に置かれて子どもが自由に遊ぶことができる。
- ・ ドラムセットも置いてあって、子どもがそれを叩き、その横で子どもが踊るというようなこともしている。
- ・ 「見えないものを描く」ということは「主題の変奏」とも言われ、「子ども達に、音を目に見える絵にし、目に見えるものを奏でる音にすること。こうしたことは、様式を交差した表現と呼ばれており、新しい見解と洞察という光をもたらす」と考えられている。
→「さっき食べたオレンジの香りを、絵や音で表現してみよう」などの保育につながる

- アメリカでは、「自己表現用教材」、子どもたちが自分の感情を表現できるようになり、それがまた自然にできるようになっていくこと。これに反して、レッジョでは、考えを表現出来ることに主眼。例えば、水が実際どのように泉に流れているとか、雨がどのようにフルかなどを説明できるようにするのが狙い（雨がどこから降ってくるのかを推測し、それを図に表し説明する等）と考えられる。
- アメリカの保育者たちは、自分たちのせいで子どもの創造性が損なわれるのを心配し、あまり介入せず、道具屋材料が安全に取り扱うのを確認はするものの、材料をいかに効果的に使えばよいかを自分で考え出すようにさせる。一方、レッジョでは、ためらうこと無く技術を教え、必要とされれば手を差し伸べるが、何を描き、どうするかは自由に行わせる。

記録文書（ドキュメンテーション）

- 子どもたちの意見、討論、彼らの活動を撮った写真、多くの媒体物を用いた彼らの思考と学びの表現の記録は、芸術専門家や他の保育者達によって注意深く整頓され、文書化される。
- 具体的には、「カメラ、テープレコーダ、スライド投影、タイプライタ、ビデオカメラ、コンピュータ、そして、コピー機」、これらを総動員してドキュメントを作る。
- 最終的な作品だけでなく過程も見せていこう、それがドキュメンテーションの思想
- 文書化にはいくつかの機能がある
 - 親に子どもたちの経験を伝え、彼らのかかわりを維持する。
 - 保育者たちに子どもたちをより良く理解させ、彼ら自身の仕事を評価する。
 - 保育者たちの専門的な成長を促進させる
 - 保育者や親たちの意思の疎通や発想の交換を容易にし、多くの子どもたちに、自分たちの努力が高く評価されることを気づかせる
 - 学校の歴史をたどる記録文書は、保育者たちが学ぶ楽しさを生み出す

プロジェクト学習

- 数日から数ヶ月かけて、2-5人の子どもがグループで学んでいく形態
- 中身は、日々の出来事、着想、問題、体験。
- 通常は午前中に行われ、「年に1回はプロジェクト学習に参加しましょう」と子どもは指導される。
- プロジェクトの立案は、子どもたちや保育者たちの経験の連続から生じる。例えば偶然の出来事、着想、一人あるいは数人の子どもたちがだした問題、または保育者たちが直接始めた体験からでも始まる。
- 一度きりで保育実践を終わりにせず、何回も同じ主題を追求していくという「螺旋状の循環性」の学びを実現している。
- 教師は特定のねらいを定式化しない。

「教師は、プロジェクト学習をする子どもの2～5人のグループが、どこに行き着くのかを知らない。このような開放性は教師の仕事に非常に困難さを加えるけれども、仕事を一層面白いものになっている」

→エマージェント・カリキュラム

カリキュラムは、あらかじめ設定されたものではない。保育者たちは大まかな目標を示し、活動や企画がどちらの方向へ進むかを推測し、適切な準備をする。そして子どもたちの活動を観察した後、自分たちの観察結果を比較し合い、一緒に検討し、解釈して、子どもたちの探求と学びにおいて彼らに何を与え、どのように支えていくか、子どもたちと共有することを選択する。

【群衆プロジェクト】（ディアーナ幼児学校）

一人の子どもが夏の休暇に経験した子をと教室で話したことから始まる。保育者たちは、子どもたちが海岸や田舎での発見を語ることに期待していたのだが、一人の子どもは「人混み」だけを覚えている、と言った。

【小鳥の公園プロジェクト】

校庭に訪れる鳥に、前年度の5歳児たちが興味を持っていたことを保育者たちが検討をはじめ、子どもたちと討議。それを受け、子どもたちが鳥の遊園地を作ることを決めた。この興味は、さらに小さな湖と、鳥の小屋と、観測所を作ることに発展した。

【『街と雨』プロジェクト】（ラ・ヴィレッタ幼児学校）

雨の降る前の街の様子を写真に取り、雨が降ったらどうなるかを子どもたちに予想させる。その後、雨期に入り雨が降りだすと、人々がどのように歩くスピードと姿勢を変えるか、水たまりが反射する光のきらめきと、跳ね上がる水しぶきがどんな風に街路を変えるか、雨が歩道、車の屋根、あるいは木々の葉のどれに落ちるかで雨だれの音がどう変わるのか？子ども達は注目。そして、雨のさまざまな側面を表現する。

【『恐竜』プロジェクト】（アンナ・フランク幼児学校）

恐竜に興味を持った子どもたちと共に恐竜について調べていくうちに、実物大恐竜を描くということに発展したプロジェクト。

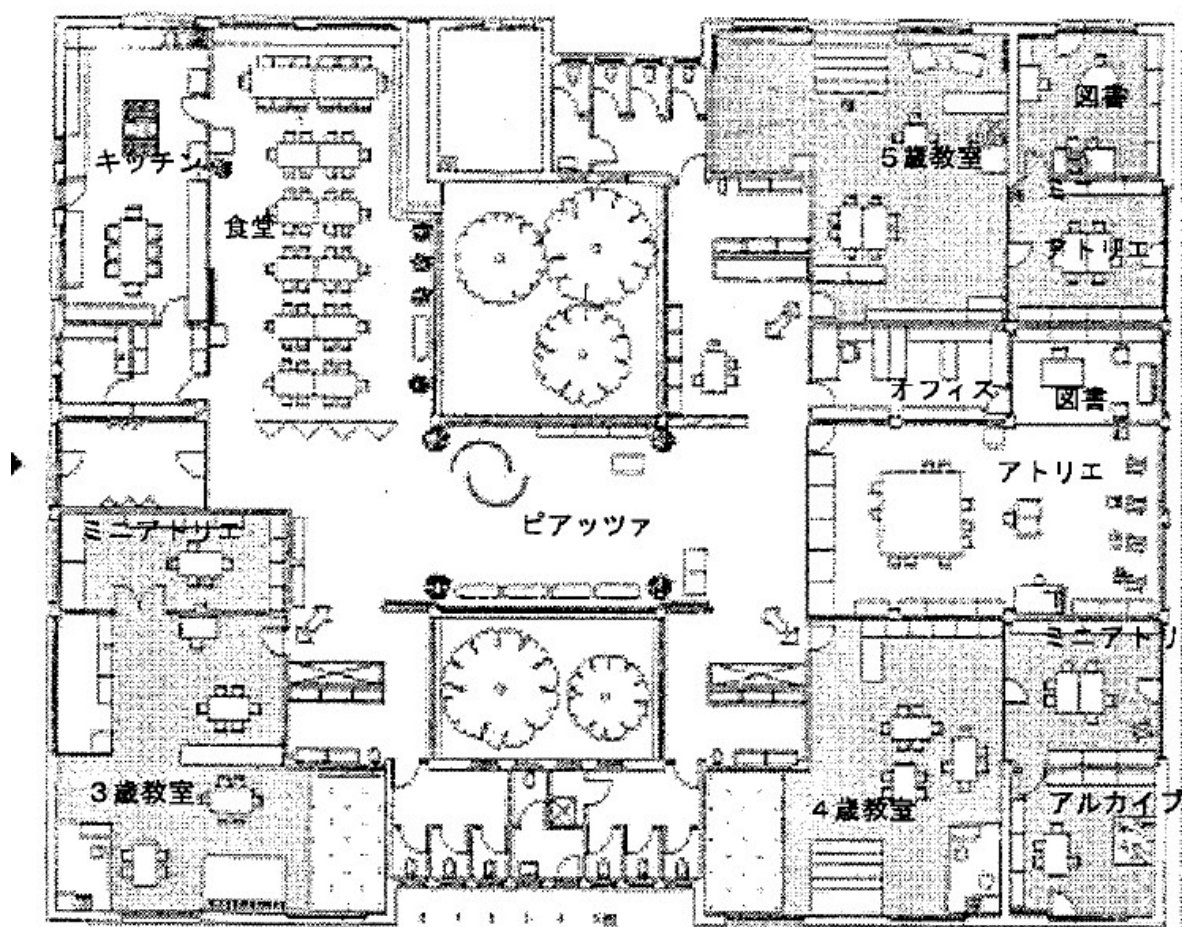
親たちの役割

- 親たちは、プログラムの重要な要素とみなされ、個々の学校を運営する諮問委員会の一部をなしている。日々の相互作用、学校での活動、保育および心理的問題の討議、特別行事、遠足、式典など、さまざまな形で参加が期待されている。

共同性の役割

- 組織の基幹として協力と共同を大切にしている
- 子供同士、保育士同士、さらには保育者と子どもが共に学び、そこに親も参加する。さらには、地域と共に学ぶという思想が非常に強く、1人だけが学ぶという考え方はない。
「私が学ぶということは、みんなが学ぶということである。みんなが勉強するということは私が勉強するということである。そして、誰も急いだり緊張したりしていない。ゆっくりとしたペース、ゆったりとした気持ち、時間通りに終わることを目標にしない。」
- 教師には、学び手を価値ある者として捉えて専門的に学ぶという役割がある。つまり、子どもだけが学ぶのではなく、教師も学ぶと考えられている。
- 子どもについての事柄あるいは子どものための事柄は、子どもから学ぶしかない、これが、保育者の使命であるとされている。
- 間違い、葛藤、失敗、異なった考えの交流は、レッジョ・エミリア保育実践では大事にされる。成功することだけではなく、間違いや失敗を大事にする。＝「交渉する学び (negotiated learning)」と言われている。
- 意志の疎通が非常に大事にされ、「私とは誰か、それは私達のことである」という合言葉が、彼らの学びの共同体を表すキャッチフレーズ。「私とは、私達である」という言葉を、教師は好んで使う。
- 子どもには、一人一人にメッセージ・ボックスがあり、メッセージを、親が入れたり、先生が入れたり、友達が入れたりする。

5) 空間の特徴



Diana

『The Municipal Infant-Toddler Centers and Preschools of Reggio Emilia』より

図1 レッジョ・エミリアのディアナ幼児学校

全体的な特徴

- ・ 玄関ホールに入ると広い中に中心的なスペースがある（ピアッツァ）。広場の周りにクラス室が配置され、各クラス室にはさらにミニ・アトリエ、暗い部屋など性格の異なる空間に分けられている。光で遊ぶ機会を作り、アトリエにはリサイクル材料など多様な素材が用意される。
- ・ 大きいアトリエ、コンピュータのスペースもある図書室、記録保管室と収蔵室がある。
- ・ 親密さが大切にされ、ガラスの壁を多用して、子どもが隔離されたと感じ無い工夫がされている。
- ・ また様々な形の鏡を随所に配置して、子どもが自然に学ぶ機会を多くしている。
- ・ 空間を「第三の教育者」として捉え、空間が子どもたちの社会的、感情的、認知的な学びに火をつける可能性があると同時に、幸福や安心感の感覚をもたらしてくれると考える。
- ・ また、「語る空間」として、壁が記録し、展示し、来訪者に語りかけると考える。

教育アプローチの一部としての空間

- ・ コミュニケーションと情報のオープンさが大切にされている。
- ・ 教師が子どものために空間を魅力的に作る方法を探求する道が開かれている。想定しうるつながりや構造のネットワークの中にある人と人とのやりとりや、人と建物との相互作用を生み出すと同時に、コミュニケーションを生み出すために、全てのものが注意深く選ばれ配置されている。
- ・ 教師は子どもの興味と考えを拾い上げ、それを同僚の教師たちと分かち合って議論し、そして対話や道具や素材や空間の構成と結びついた方略に乗せて、それらの考えを発展させたり結びあわせたり、形を変えたりして子どもたちに返している。

建築的に計画された空間と学校を超えて広がる空間

- ・ 幼児教育は地域に根ざした関心ごとであり責任問題であるという考え。理想的には、子どもの教育施設は都市計画の不可分な部分となるべきである。さらにそれは地域の周辺部分ではなく、子どもや教師の生活が地域の目からよく見える市民の目に触れる場に設置されるべきである。身近な地域に幼児学校があることは、それ自体子どもや家族の権利を尊重していることを示している。
- ・ 新築であれ、既存の改築であれ、教育コーディネーターと教師と親たちは建築家と共にプランをつくるために集まる。共同や相互作用を大事にする教育アプローチを行うために、壁が高すぎたり仕切りが多いことは問題であり、あらゆる選択に参加する必要がある。
- ・ レッジョ・エミリアの教育者は、空間を社会的相互作用、探求や学びに見合った「コンテナ」(運搬装置)と観るだけでなく、教育の「コンテンツ」(内容)とも見ている。つまり、空間は教育のメッセージを含み、相互的な経験や構成的な学びにむかう刺激となる。そこで、室内空間の構造は、教育プログラムに関わるあらゆることと共に発展している。

「広場」の役割

- ・ 「広場」は教室を延長するだけでなく、様々な出会いや活動を促す。さらには、イタリアの街の中心を表すものでもある。そこでは、人々が出会い、互いにおしゃべりし、政治について語ったり参加し、商いをし、路上芝居をやり、講義を行う。
- ・ 「広場」は、とだえることのない通行の場であり、子どもでも大人でも、やりとりの質がより密になる場。大人と子どもが沢山出会うほど、考えは盛んにめぐる。「広場」は考えが到着し、出発する場と言える。

文化の重なるの反映としての歓迎の空間

- ・ 空間は様々なやりかたで、その空間を生んだ人々の文化を反映し、注意してみれば、その文化の影響、積み重なりを見せる。レッジョはデザインの美しさと調和に大きな注意を払っている。
- ・ 環境の見栄えに対する特別のケアと家庭の住空間のケアは、社会的な相互作用をもたらす空間デザインであるとともに、イタリアの文化の本質的な要素である。

時間と空間

レッジョ・エミリアアプローチの時間の考え方の3つの要素

- 1) 長い歴史（戦後親たちの運営による幼児学校がもと）により、経験が豊富で、多く変化もしている。そこで、教師たちは早急な結論を得ようとはしない。
- 2) 0-3の乳児保育所と、3-6歳の幼児学校では3年間同じ保育者と子どもと一緒に過ごす。新しい関係への適応期間もないので、全く新しいところから1年を始めるというプレッシャーがない。
- 3) 教育とデイ・ケアが区別されていない。全てのプログラムはケアと教育を共に提供するものとされている。

これらの要素から、子どもが自由に子どものペースで楽しむ事が出来る物理的環境の配置になっている。

「アトリエ」の役割

- ・ アトリエは、幼児のためのより幅広い教育プロジェクトの一環として、どの幼児学校にも設けられ、1970年に始まった乳幼児保育所でもその一部になった。
- ・ アトリエの作業は、教育アプローチに結びついたもので、視覚と表現の教育に割り当てられ、今までの言葉や無意味な決まりごとに則った教育への挑戦！
- ・ 手と頭を使って探求し、視覚芸術の実践を通して目に映るものを洗練させ、教室で計画された活動と結びついたプロジェクトに携わり、新しいあるいはおなじみの道具、技術、素材を組み合わせようと試す。

異年齢や発達段階に適応する空間

- ・ 玄関の右側には座り心地の良い椅子があり、親が子どもと休んだり、誰かと会ったり、教師と話したり出来るようになっている。
- ・ カーペット敷きで枕のある部屋では、子どもが安全に這い回ったり、絵本を見たりおはなしを聞くための場がある。具材があれこれ試せるアトリエもあり、ガラスの仕切りは子どもが隔離されていると感じがちな乳児保育所で特に多用される。
- ・ 異年齢集団の子どもが遊んでいたり作業したりしている様子を見ることで発達を促している。

6) レッジョ・エミリアとアメリカ（と日本?）

アメリカ	レッジョ	日本
「プロジェクト」またはテーマは短期間行われる。1日か1週間続く。	「プロジェクト」は簡単なものであるが、しばしば何週間も何ヶ月も続けられる。	
「トピック」を使って情報を与える。そして（あるいは）中級レベルの思考能力で実践する。	「トピック」を使って問題を提起し、考えるよう刺激する。	
子どもは様々な題材に対しての情報を取得するが、その情報は浅く、ごくわずかな物である。	子どもたちはごく僅かな題材についてだが、深い知識を得る（つまり、少しについて多くを知る）。	
探究学習は科学の作業場で主になされる。子どもたちは問題を解決するようにすすめられる。	子どもたちにやる気を起こさせることにはっきりと重点が置かれ、子どもたちに事物が起こる理由と問題の解決が出来る方法を提示させる。	
子どもたちは自分たちが分かっていることを保育者に話して聞かせることにより説明をすることになる。	子どもたちは話すことにより自分たちの知識を説明するが、また、別の様々な方法も用いる。例えば、模型、グラフィック、曲がったワイヤー、ダンス等を用いて自分たちのアイデアを説明する。つまり「他の誰かに説明できて初めてそれがわかったと言える」のである。	
個人が強調される。すなわち、自立、自己責任、独立心に価値が置かれる。	グループの中に存在することが強調される。すなわち、共同性と相互依存を解する心に価値が置かれる。	
子どもたちは各自、何でも自分たちがしたいと望むことを選択していく。	子どもたちはしたいことを選択するが、また、引き続いている興味内容に基づいて分けられた今までの小グループに入って作業してはどうかとすすめられる。	
時間は綿密に区切られ、時間割がつくられる。	時間は急かされること無くゆっくりと過ぎる。	
記録を記入するのは、一般的には作業が行われている経過ではなく、むしろ結果を記入するように限定されている。-子どもたちが何を学習し得たか（チェックリスト、一覧表、観察）、または何を分かっているか。	記録記入-記録文書掲示板に記録をしていく。プロジェクトの始まり、その途中、そして終わりにいたって子どもたちが「認知している」ことが記録される。掲示板は全員がなんども見に行き、作業の進行状況を再認識するために利用される。	

保育者たちは少なくとも年に1度代わる。	保育者たちは3年間子どもを受け持つ。	
スタッフとして保育者がいる。または保育者と助手がいる。	スタッフとして同じ地位の保育者が2人と、さらに芸術専門家と教育専門家がいる。	
スタッフの地位の序列(園長、保育者、助手)。	学校長はいない—みながそれぞれ、さまざまな責任を引き受ける。	
対立は避けられる。	大人同士の意見の相違、また大人と子どもたちから起こる議論と対立は、全員にとって好ましい学びの手段として取り入れられている。	
保育者たちは孤立しやすい一方、策やスタッフミーティングの取り決めは、その時により変わる。	親密な共同作業が全保育者間で定期的に頻繁に行われる。	

【参考文献】



「子どもたちの100の言葉

ーレッジョ・エミリアの幼児教育」

佐藤 学 (翻訳), 森 真理 (翻訳), 塚田 美紀 (翻訳), C.エドワーズ, L.ガンディ
ーニ, G.フォアマン



「子どもたちの100の言葉

ーイタリアレッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録」

レッジョチルドレン (著), 田辺 敬子, 木下 龍太郎, 辻 昌宏 (翻訳)



「レッジョ・エミリア保育実践入門

ー保育者はいま、何を求められているか」

ジョアンナ ハンドリック (著), Joanne Hendrick (原著), 石垣 恵美子 (翻訳),
玉置 哲淳 (翻訳)



ビデオ レッジョ・エミリア市の挑戦

出版社名：小学館 発売日：2001年11月

3-場・歴史、4-9 ティアナ幼児学校、10-13 アルコバレーノ乳幼児院、14-空間の説明、17-アルコバレーノ環境の豊かさ、19-ラヴィエッタ幼児学校造形での豊かな素材、22-光を描くプロジェクト、25-科学、29-教育の出発、33-親・教師、35-プロジェクト、38-ドキュメンテーション、43-身体プロジェクト、45-ドキュメンテーション、48-手紙プロジェクト、50 市教局理事、51 ワタリウム美術館、53 まとめ3つのD デザインドキュメンテーションディスクコース